

途上国アルバム：南アフリカ

天谷和彦

元・JICA 南アフリカ事務所 企画調査員

1. 南アフリカの概況

2019年2月～2021年2月、私は国際協力機構(JICA)の仕事で、南アフリカ共和国に海外赴任をした。そこで南アフリカ（以下、南ア）の社会経済状況や文化、人々の暮らしを紹介したい。南アは中進国だが、失業率の高さは依然として大きな社会問題となっており2010年以降からは25%前後を記録し、2017年、2018年にはそれぞれ27.3%、27.0%と悪化傾向を示している。若年層の間では63%が失業しているという報告もある(JICA 国別分析ペーパー 2016)。格差の高さもジニ係数が0.61であることから窺える。南アにおいてはトップ10%の富裕層が71%の富を保有している一方で、最下層の60%の人口が7%の富しか有していない(世界銀行、2019年)。また人種間の格差も大きく、人口の10%の白人が先進国並みの60,000ドル(約650万円)前後の年間平均所得があるのに対し、人口の80%を占める黒人は白人の5分の1以下の所得水準(推定12,000ドル≒約130万円以下)となっている(外務省、2019年)。



近代的なショッピングモール



大都市の周りに形成されたタウンシップ
(貧困層居住地区)



南アの経済を支えたダイヤモンド鉱山

2. 言語・民族の多様性

南アでは17世紀にオランダ系移民のボーア人が入植し、コイ人やサン人などとの先住アフリカ人との争いも起きた。19世紀にはイギリス系移民の増加に伴い、ボーア人が自分たちをアフリカーナーと呼称し、イギリスの奴隷制度廃止措置に反発し、1830年代から1840年代にかけてイギリスの統治が及ばない北東部の奥地へ大移動を開始した（グレート・トレック）。アフリカーナーは内陸部へと進み、ナタール共和国（1839年建国）や、トランスヴァール共和国（1852年建国）、オレンジ自由国（1854年建国）などのボーア諸共和国を建国した。しかし、セシル・ローズに代表されるように南アフリカ全土を領有することを求めたイギリスとの対立から2度にわたるボーア戦争に発展し、最終的にイギリスが勝利した。アフリカーナーのみならず、独立していた先住アフリカ人諸民族のアフリカーナーとイギリス人双方に対する抵抗も続いたが、抵抗した民族はすべて敗れ、南アフリカはほぼ完全にイギリスに支配された。現在の南アでは英語、アフリカーンス語、バンツー諸語（ズールー語、ソト語ほか）の合計11言語が公用語である。黒人はズールー人、コサ人、ツワナ人、ソト人（南ソト人）、ペディ人（北ソト人）、スワジ人、ヴェンダ人、ンデベレ人、ツォンガ人のバントゥー系民族で非常に多様であり、アパルトヘイト撤廃後は民族間の対立が深刻化している。



白人入植者と現地民族の激しい戦いの歴史



アフリカ文化村で現地の伝統的な生活様式を説明する部族の男性



現地の英雄の像

3. 治安

アパートヘイト廃止後に起きた失業問題により、南アフリカでは急速に治安が悪化した。現在、ヨハネスブルグをはじめとして南アフリカの都市では、強盗、強姦、殺人、麻薬売買などの凶悪犯罪が昼夜を問わず多発している。凶悪犯罪においても、軒並み世界平均件数と比べて異常に高い犯罪率となっている。毎年約2万人が「殺害」され、毎日約60人が殺されており、強盗件数は毎日500件、戦時下ではないにも関わらず、戦争中レベルの治安である。殺人被害は、南アでは未遂を含め、10万人あたり一日約70人となり、日本の0.75人/10万人と比べ、90倍以上の被害が発生している。犯罪の中でも多いのが、屋内・屋外強盗、スマッシュ・アンド・グラブ、スキミング犯罪、窃盗、置き引き、屋内・屋外強盗、カージャックなどである。特にヨハネスブルグのヒルブロウ地区は、南アで最も危険な地域の一つと言われている。ヒルブロウは、地元の黒人の人も頻繁に襲われ、組織的な犯罪グループの巣窟となっているとも言われている。



南ア最大のタウンシップ（貧困層街）であるソウェト地区。「So where to?」（それでどこへ行くの？）という意味もある。



ダーバンの壁の絵



黒人系南アフリカ人の間で人気のバーベキュー

4. 自然・観光

首都プレトリアのジャカラランダの花や、ドラケンスバーグ山脈、風光明媚なケープタウンなど豊かな大資源が生み出す観光資源は多い。南アには、ユネスコの世界遺産リストに登録された文化遺産が4件、自然遺産が3件、複合遺産が1件存在する。また、年間の晴れの

日が最も長い国で、「太陽の国」とも呼ばれている。南部アフリカの国々に観光に来る国際的な観光客は、ほとんどが南アに来る。南アに滞在し南ア国内の観光をしながら、近隣のボツワナ、ジンバブエ、ナミビアなどに足を延ばす観光ツアーが人気である。南アは観光において、南部アフリカの「玄関口」だと言える。



首都プレトリアは、ジャカランダの花で有名



車の横までやってくるシマウマ



地平線が広がる南ア

5. おわりに

多様な民族を抱える南アは「レインボーネーション」（虹色の国）と呼ばれる。民族に加えて、貧富の格差による二重社会、都市と大資源の対比、近代的な都市型生活の傍らで、国立公園で希少動植物が保護されているなど、「多様性」に富んだダイナミックな国である。長期赴任した当時を思い出せば、とにかく、全てが広い！という印象を持った国であった。小さな島国の日本から南アに行けば、その雄大さに度肝を抜かれたり、逆にアバウトで大雑把な社会に辟易するかも知れない。2021年5月現在、新型コロナウイルスの変異種が見つかり、感染が拡大するなど、南アは何かと大変な状況ではあるが、いつか新型コロナウイルスが収まった際には、ぜひ一度、南アを訪れ、その雄大な自然を堪能したり、都市と郊外の生活の違いを感じてほしい。もちろん、治安には最大限の注意を払いつつ！



ライオンの群れ



平均海拔 1000mの南アフリカの冬
(6~9月)は、最低気温が0度近くまで
下がる。



緑に囲まれた首都プレトリア